〔東京家政大学研究紀要　第30集 (2), p. 87～94, 1990〕

メキシコ・グァテマラ国の衣服文化の研究（第4報）

グァテマラの民族衣裳における文様と色彩

赤　池　照　子

（平成元年9月30日受理）

A Study of Clothing Culture in Mexico and Guatemala (Part 4)

Colors and Patterns of the Folk Costumes of the Guatemala

Teruko AKAIKE

(Received September 30, 1989)

は　じ　め　に

人間のくらしの中で，服飾は身体保護の目的をもって発生し，発展の過程の中で形に対する興味やデザイン・色彩に対する感覚などが，自然の環境や風土に影響されながら必然的に育ってきたと考えられる．更にそれぞれの歴史の中で，民族の移動や政治的変化，外来文化の影響を受けながら複雑化し，種類も増加するという形態をとっている．

しかし，メキシコ・グアテマラのインディオの服飾は殆ど原始形態そのままに停滞した状態である．グァテマラ中西部の高地にあるチチカステナンゴ村で，華やかな民族衣裳をつけたインディオでごったがえす木曜市に足を踏み入れた時，古代マヤの世界に飛び込んだような錯覚に落ち入った．鮮やかな原色を主調とする貫頭衣に藍色のスカートを巻いた女性や同じようにカラフルなシャツとズボンを履き，腰にサッシュを巻いた男性など，日用品を売る人，求める人で賑っていた．着ている衣服を一つ一つ見ていくと，主調となる色は決っていて，そこに織り込まれた文様や色合は，それぞれ個性があり，鮮やかな中にも整然とした基準が感じられる服装であった．

グアテマラ＝インディオはマヤ族の末裔で，言語集団によって小地域に分かれ，部落ごとに古来からの伝統や風習をしっかり守りつづけられている．そのため，色彩や文様に特殊性が現れるのである．そこで，今回の調査旅行（1987年8月20日～9月2日）で得た資料をもとに，グアテマラ＝インディオの民族衣裳における文様と色彩を分析報告する．

尚，メキシコ・グアテマラの風土及び調査過程については，前集（第29集）を参照されたい．

服飾美術科

1. 古代マヤ文明と芸術性

グアテマラ高地，低地を中心にメキシコ南部，エル・サルバドールとホンジュラスの一部にわたって古代マヤ文明は栄えた．

紀元前500年から325年あたりがマヤ文明の形成期とされ，紀元300年から900年頃までの古典期が最も栄えた時代であった．その後，100年して，10世紀頃急激に衰退したが，1532年，スペイン人の侵略によって破壊されるまで続いた．マヤ文化の中心地はユカタン半島の森林地帯で，高温多湿の地域に集中している．ウシュマル，チチェンイッツア，カバーなどの廃墟が広漠とした密林の中に点在し，広場を囲んで神殿群とピラミッドの壮麗な建築群を残し，文化的特色を見ることができる．

樹海にそそり立つチチェンイッツアのピラミッドには四面に91段ずつの階段がつくられ，これに神殿の祭壇を加えると合計365で一年の日数となる．また，二層の円形の塔があるが360度の展望が得られ，肉眼で天体を観測する天文台と考えられる．農耕生活としての気象や様々な祭儀の役割をはたしていたと見られ早くから天文学に優れていたことを知ることができる．更に驚くべきことは，あらゆる文明にさきがけて，零の概念をもち，数学が異常に発達していたことである．このことは現在のインディオに受け継がれたと思われ，優れた機織り物にうかがい知ることができる．

芸術面でもすばらしい感覚を持ち合わせており，石彫，木彫，土器，絵文書など残している．神殿や貴族，僧侶の館といわれる建造物は石灰石を積みあげたものであるが，その壁面には天界の蛇，人象，長い鼻を持つ雨の神

チャック，幾何学的な格子文や雷文などのレリーフが刻まれ，それは大胆で然も均整のとれた美しさである．金属器は知られていなかったので道具はすべて石である．石器を使用しながら独特の表現を成し得たマヤ人の洗練された技術と美的感覚をこの装飾の中から伺うことができる．(写真１)

写真１　雨の神チャックとへびのデザイン（ドナ遺跡）

2.　古代マヤの服飾について

古代マヤの服飾や織物は装麗な建造物やピラミッドなどが残されているにもかかわらず，殆ど残っていない．それは古典期のマヤ文明の栄えた地帯が，熱帯雨林の高温多湿の地域だったため有機物のほとんどが消滅してしまったものと考えられる．

従って，壁画や石碑，土器，絵文書などに刻まれた人物像や文様などから推察されるにすぎない．又，児島英雄氏の著書にスペインが統治した頃の記録（フエンテス＝イ＝グスマン1690〜99）が記載されているが，それによると「当時の人々の服飾は，農民を含む下層階級では樹皮布による褌と綿以外の繊維による貫頭衣．商人，工芸職人といった中産階級では竜舌蘭から採る繊維か綿で作った無地の衣裳を着ていた．しかし，上流階級（貴族・神官・上級軍人）の人々の衣裳は非常に華美なもので，しっかりと織られた白木綿地に赤・青で文様が施された上着に身を包み，裾に飾りの付いた膝までのズボンを履いていた．美しい帯は結んで前へ垂らされ，髪は織り込みの美しい細紐で束ねて背後に垂らした．軍人の細紐は赤と青で彩られ，大きな房が付けられ，なかでも際立って美しかったものは大きなケープで，鳥や動物の文様が施され，編による文様や房などで飾られていた．」とある．

このことは古典期のマヤ社会は貧富の差が激しく，血統によって社会的地位がはっきり区別された階層社会であったこと．また，神官，政治的指導者，軍人，などの像には衣裳を付け沢山の首飾りや腕輪，鳥の羽などで身を飾っているが，農民や下層階級の人々は，裸同然の貧しい姿であったことがうなづける．しかし，イシュチェルという織物の女神が絵文書や石彫に見られることからマヤ人は古くから優れた機織の技術を持っていたということは明らかな事実である．

1532年スペイン人によってマヤ文明は解体してしまったが，その技術は現在のインディオに受け継がれ，今日まで伝統的衣裳を守りつづけている．

3.　グアテマラ＝インディオの民族衣裳について

中米北西部に位置する高原地帯におよそ80の村々が点在し，マヤ系インディオが伝統的な美しい衣裳を身につけながら独自の生活習慣をもって生活している．彼等はキチエ語族，カクチケル語族，ストウヒル語族，ポコマム語族，マム語族，イシル語族など大小20余りの部族が独自の言語や風習ごとに固まって生活する特色を持っている．

従って村ごとにそれぞれ特徴のある文様や基調色を持った織物を織るので，どこの村のインディオであるかは衣裳によって区別することができる．かつては織職人として，祭祀や上流階級の人々の衣裳のために織る機織りの技術であったが，今では階級制度もなくなり，家族や自分の衣裳のために織るようになった．

縦糸を樹木にくくりつけ，棒切れを使って織る原始的な地機である．(写真４）原理は実に単純であるが，多彩な糸を使いながら，すばやい早さで模様を織り出す技に，数の知識が異常に早く発達し優れた織りの技術をもった先祖の血が感じられる．しかし，原始的な民族衣裳をまとってはいるが，全くヨーロッパの影響を受けなかったわけではなく，すでに女性のスカートやショールはスペイン人によってもたらされた高機によって縞や絣が織られたり，また，男性のズボンの上から巻くブランケットなども大量に生産されている．男性がズボンを履き，シャツを着て帽子をかぶるようになったのも多分にヨーロッパの影響を受けたと見られ，近代文明と共存しながら伝統の衣裳を守っている．

衣裳の色彩，文様，帯の巾，頭飾りなど部族ごとに伝

統に固執しているところに特徴がある．

1）衣裳形態と文様の配置

女性の一般的な衣裳形態は　1.ウイピール（貫頭衣）2.コルテ（腰布）3.フアハ（帯）4.シンタ（又はリストン・頭飾り）5.ペラッヘ（ショール）6.スーテ（大型万能布）

男性の衣裳形態は　1.カミサ（シャツ）2.パンタロン 3.ブランケット　4.フアハ（帯）　5.ボルサ（袋）である．

特に縫取織文様はウイピール，フアハ，シンタ，パンタロンにみられるので，今回はそれについて述べる．

（a）ウイピール

裁断することなく，織布をそのまま用いる．2枚はぎあわせた2枚構成と，3枚はぎあわせた3枚構成が基本である．衿ぐりは，2枚あわせたものは，中央に頭をとおすだけの大きさを接ぎ残すか，四角又は丸くくってそのまわりを色糸でボタンホールステッチをする．3枚にはぎあわせたものは，中の布の中央に穴をあけ，縁を刺繍するか別布で縁取りをする．巾の大きいウイピールは儀式用として祭儀などの時，普段着の上から羽織るように使うことが多い．色は白綿を中心に赤く染めた糸を使う場合も多く，無地又は縞に織り，織りながら文様を加えてゆく．茶綿の色そのままを用いたのもあるが極く少ない，縫取織の文様の配置は，それぞれ異なり，ほとんどが胸から肩にかけて縫取織文様が入る．（図1）一段ごとに動物の種類と大きさを小から大へと変化させた大変に凝ったものもある．（サン＝ペドロ＝サカテペケス）

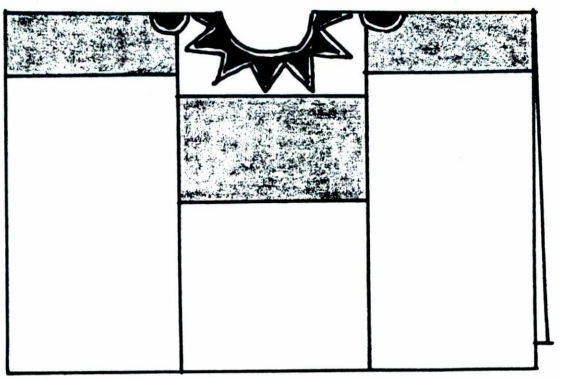


図1　文様の部分が十字形を示すウィピール

3枚構成では3枚とも同じ文様に織る場合と，中央の布と左右の布の文様構成が違う場合がある．特に儀式用のものに多くみられる形式には，ウイピールを一枚に広げたとき衿り明きを中心に文様の部分が十字になっている．（図1）十字は天と地の四方位を表す重要な形で，古代マヤからの伝統を織物に表したものである．又，普段着に用いているポコムチー族のタマウ村では，中央の布と左右の布が色も文様も異っている特色を持っている．ヨーロッパの影響を受けたとみられる刺繍を用いたウイピールもある．縫取織と併用して衿明きまわりに花文様をあらわしたり（サンテイアゴ＝アテトラン村），ヨークのように半円形に民話や伝説を刺したりする．縫取織と違ってのびのびとした軽快さとモダンな雰囲気があらわれている．スンバンゴ村，サン＝クリストバル＝トトニカパン村，サン＝アンドレス＝シエクール村などは刺繍が盛んである．

（b）パンタロン

男性の伝統的衣裳は衰亡の一途をたどっており，開衿シャツとパンタロン，ジャケット姿が多くなってきている．それでも地域によっては，かたくなに伝統衣裳を守っている村もあり，女性のウイピールに負けずカラフルである．地機で織る縫取織文様はウイピールほど凝ってはいないが，縦縞の間に細かな鳥や動物，花の文様が織りこまれている．（写真2）

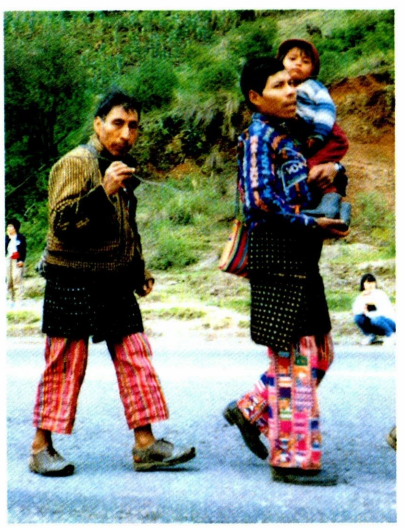


写真2　カクチケル族の男性

パンタロン全体に文様を入れる場合と，裾から20cmぐらいの巾に入れる場合とがある．ウイピールと同様，裁断することなく，織巾いっぱいに脇と前後を縫い合わせる．股上は比較的深くとり，上端を華やかなフアハ（帯）で締める．従ってフアハは女性のものより巾が広く，両端には，大変手の込んだ縫取織文様が施されている．

（c）フアハ

ウイピールとコルテ，カミサとパンタロンの上下2部式着衣にとって帯はスカート，パンタロンの上端を止めるために不可欠である．マヤ系インディオの帯はカラフルで部族によって巾，長さ，色，文様が異っているが，巾は3～4cmから30cmぐらいのもの，長さは3mから5mぐらいまでのものがある．帯全面に織文様を入れたり，両端だけに文様を入れたもの，或いは二重織や縦縞など，いずれも部族の特徴を現している．但し，サンティアゴ＝アテイトラン村のストウヒル族の女性はフアハは使わない．

（d）シンタまたはリストン

古代マヤの血を受けたインディオは，装飾や色彩感覚には他の民族に見られない独特の感覚を持っている．その一つに現れているのが頭飾りである．帽子のつばのように長い手織りの紐を頭に巻きつけたり，（サンテイアゴ＝アテイトラン村）巾43cm，長さ3mという帯のような飾り紐を髪の毛とともに巻き込んだり（ネバフ村）カラフルな布きれを三ツあみの髪に編み込んだり，部族によってさまざまである．シンタの中には専用の織機で織る綴織りや裏側には全く文様の表われない独特の縫取織で，細かい幾何学文様や人物・動物文様をぎっしり織り込むもの（アグアカタン村）（写真3）など，更に両端に房飾りやボンボンの飾りをつけて，華麗に色どられたもの（ラビナル村）などある．どの村もシンタだけは専門としているトトニカパン村で織られるという．

2）織物に見られる文様

一般に織物は農耕社会として一つの地に定着することから始まる．マヤ社会では，トウモロコシを主食とし，マメ，カボチャ，綿などの栽培がおこなわれたとみられる．そして農耕をおこなうためには水が必要であり，天水を願うために宗教が生まれ，神殿が作られ，多くの神々が誕生する．天体観測も暦もこのようなことから発達したのであろう．綿の栽培は織物の発達につながる．階級制度が確立し，一種のシンボルや宗教的な装飾などの必要から織物に対する文様の表現や技術の進歩をうなが

写真3　アグアカタン村のシンタ

写真4　サン＝アントニオ＝アグアカリエンテスの女性

したと考えられる.

グアテマラの織物には浮織・紋織・羅織・綴織などがあるが一番多いのは，地機による縫取織である．地機は経糸の先端を柱にかけ，もう一端に帯をつけて織る人の腰にまわす．手もとから織りはじめ，織り上った部分は布巻きに巻き取り，先へ織り進む．そのまま織り上げることが普通であるが，ウイピールやフアハのように丈が決っているものは，先端と手前の布巻きをひっくり返して，もう一方の端から織り進むこともできる．そのため，一枚の布が四面とも耳になるので，ウイピールなどは裾が耳のままである．これは前後の文様がさかさまにならず，文様を打ち出すにも扱いやすい．今ではどこの家でも女性が小さな地機を使ってウイピールやスーテ，フアハを織っているので女性にとって重要な仕事の一つであるといえる.

縫取織は技術的な展開はみられないが，緯糸のさまざまな色かえには緻密な計算と技術を要したと考えられ，幾何学的な文様が多い中に動物や植物，鳥，昆虫，蛇或いは人物まで身近かな存在のものが織り込まれ，古い伝統衣裳の様式を母から子へと守り続けている.

3）文様の分類

・幾何学文

三角，四角，菱形，山形，縞，格子，卍形，渦巻，波形

・天象文

太陽，月，稲妻

・神話や伝説（宗教，農業）

双頭の鳥（コーツ），羽毛の蛇（ケッツアルコアトル），ケッツアル（グアテマラの国鳥），巨人，雨神チャック，四方位をあらわす十字，生命の木（セイバ）

・動物文

虎（バラム），鹿，貘，兎，孔雀，七面鳥，鴨，あひる，鶴，蝙蝠，鳥，さそり，虫

・植物文

樹木，とうもろこし，花

・人物

若者，乙女

これらの文様と色が組合わされると，それぞれの村独特の文様パターンができあがる．（図2・3－①～④）

4）織物の文様とその色彩

文様の構成は，それが施される物の大きさや形と密接な関係をもっている．グアテマラ＝インディオの民族衣裳の形態から考えてみると，絶対，裁断することをしない直線形である．従って経糸で巾を決めたら，緯糸で色をかえながら文様をあらわす左右二方連続構成が多い．幾何学的な文様は「め」をひろう時の間隔が規則正しく記憶できるので，ひろいやすく，あらゆるところに用いられている．横線の間に山形，稲妻形，菱形をすき間なく縫取織で配列する．サン＝アントニオ＝アグアスカリエンテス村やラビナル村は幾何学文様が多い村として有名である.（写真4）

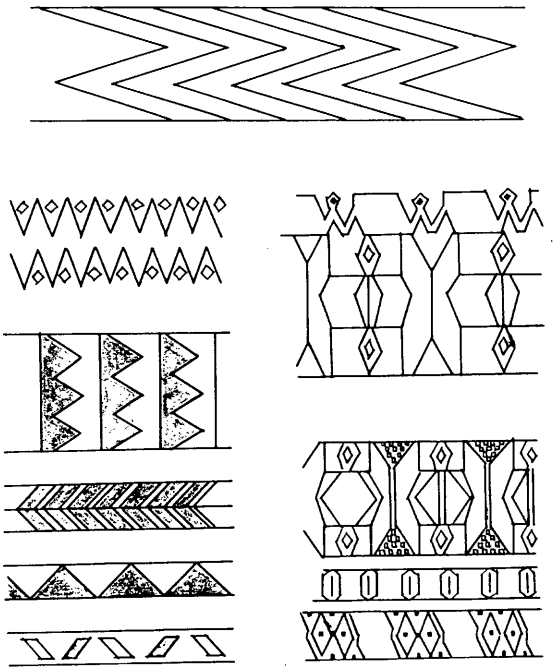
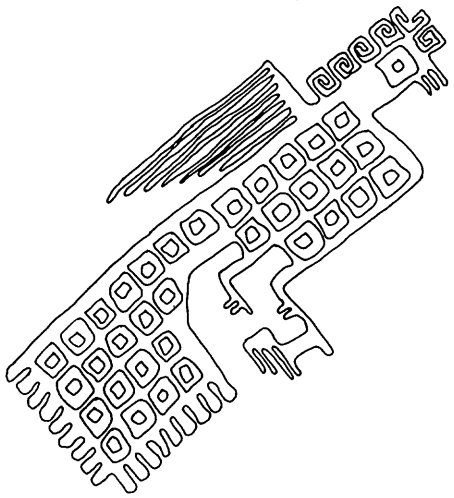


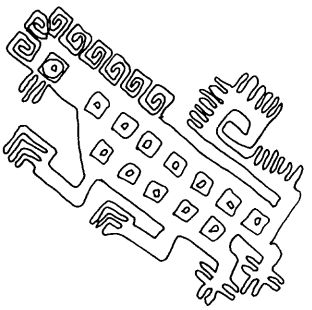
図2　幾何学文

農耕社会にとって雨の水や太陽は欠くことのできない重大な資源である．そのため集落ごとに土着宗教がまつられ，祭祀儀式がおこなわれる．雨の神チャックや太陽を現したシンボルが上流階級や祭祀をとり行う僧侶の織物にあらわれている．チチカステナンゴの上流階級の婦人の衣裳や儀式用のウイピールの衿ぐりに太陽を象徴する鋸歯状の文様と両肩には月をあらわす円形が刺繍されている.（図1）

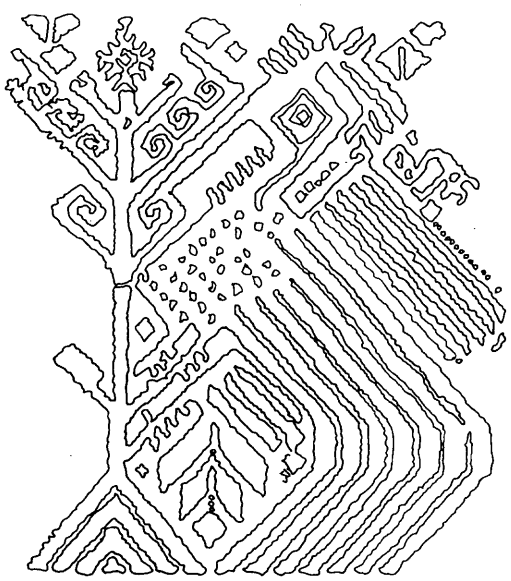
マヤの社会には神話や伝説が多く，儀式用のウイピールには，それらを主題とした文様を織り込んだものがたくさん見うけられる．コーツと呼ばれる双頭の鳥はマヤの二元性の考え方を表すもので，善と悪を見る二つの顔



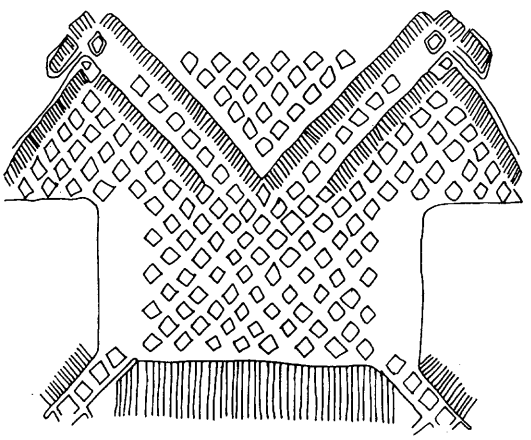
①



②



③



④

図3　①　ケッサル

②　伝説上の動物

③　木と小鳥はマム族の特長である

④　双頭の鳥

は古くから伝わる伝説の鳥なのである，デザイン化した双頭の鳥をウイピールの中央に大きく織り出したり（図3－④）二方連続に配列したりする．また，キチエー族には巨人伝説の由来があり儀式用に用いられる布などに大きく表わされている．

尾の長い美しい鳥ケツアルも良く用いられるが，これはグアテマラの森林にのみ棲息する鳥といわれ，グアテマラの国鳥として大事に保護されているので，シンボルとして扱うことが多い．（図3－①）

動物や鳥，花など具象的な文様も多い．幾何学文様のように単純に繰り返すのとは異り，形が複雑だけに表現や織り出しが難しい．なかには鳥らしいとか鹿だか羊だか判別しにくいようなものも多い．鳥ばかりを二方連続にしたもの，様々に動物文を併用したものなど部落によって特徴がある．

グアテマラ国中で最も美しい織物として挙げられているものの中にイシル族のネバフ村がある．昔ながらの風俗，習慣，伝統を根強く踏襲しており，織物にロバや鳥を連れた男と女の物語を織りこむのを特色としている．縫取織の色彩も豊富で多分に神秘的な趣をもっている．（写真5）また同族でも大地の守護神である虎（バラム）や大鳥（コーツ）などのどちらかを必ず入れるのが伝統的な特色となっているチャフル村があるが，文様の配置はまばらである．

写真5　ネバフ村の織物

刺繍は，スペインが統治するようになってヨーロッパ風のデザインものが多くなり，縫取織と刺繍を併用する村もあるが，チュフ族の村であるサン＝マテオ＝イシタタンは独特である．標高2,500メートルの山岳地帯のため，冷気が厳しく，したがって衣裳は必然的に大型で厚手のものが要求される．それを刺繍で表裏に刺すことで，ずっしりと重く暖かいウイピールとなるのである．文様は太陽を表したものといわれるが，衿首を中心に円く形づくられ，暖色系の色が見るからに暖かそうである．

5）色彩と地域性について

部族の特徴を表すことの一つとして織物文様の一部をあげたが，色合も文様とあわせて村独自の伝統色があった．現在では市場で人造染料で染められた色鮮やかな糸が売られているが，かつてはその地域で栽培された植物や虫（コチニール），国外からとり寄せた貝紫を使って自ら糸を染色することが多かった．したがって色数も少なく，華やかな中にも落着いた雰囲気である．

アロテナンゴ村では，昔は貝紫染の糸を使っていたといわれ，赤・紫の薄い色が基調色となって非常に上品な感じであった．しかし現在では貝紫が高価で手に入りにくいことから見ることが少なくなった．

ナウアラー村のウイピールはせっかくの縫取織が赤くにじんだようになっている．これは昔，堅牢度の悪い絹糸を使って，その色が白地ににじんだことから絹を使っている見せかけのために，わざとにじむ糸を好んで用いていたといわれる．ウイピールを赤くにじませたのに反し，スーテは鮮やかなサイケデリックな感じである．紺地に赤紫の縞の中に伝説上の動物を原色や中間色など10色余りの色を織りまぜて表現され，はなはだ不思議な雰囲気を醸しだしている．

カクチケル族の中央広場にソロラ村がある．ここに集まる村人は赤に絣糸入りの縞文様からなる衣裳を着ている．女も男も同じ色の衣裳を着て広場を埋めつくした風景はまるで彼岸花が一面に咲いているような感じさえもつ．

カクチケル族のコマラパ村では，茶綿を使ったウイピールを織る代表的な村といわれるが，肩のところに大きく赤い線を入れるのが特徴で，それは遠目からも見分けがつく．

このように，ある村では紫が基調色，ある村では赤が基調色というように，織文様とかかわりあいながらそれぞれが特色を出している．

4. 考　　察

1. グアテマラ＝インディオの織物にみられる特徴は，地機による手織が圧倒的に多く，平織に織り込む縫取織で文様をあらわす．従って文様は直線または斜文で表したものが多く，染色で描く更紗や友禅のように曲線的な軽快さにおいて劣り，ややかたく重々しい感じである．但し，16世紀後，スペインの影響によってまれに刺繍をおこなう村も見られる．
2. 織物は生活に根ざしている．南米地方で大量にとれたコチニールから赤を主調としたウイピールが多くみられ，化学染料の発達した今日でも伝統の色として赤を使用する．よって，グアテマラのウイピールには赤を基調としたものが多い．又，メキシコの特産品である貝紫が容易に手に入る地域は貝紫染が使われたが，貴重な染料のため主に儀式用の衣裳に見られる．
3. 縫取文様に使う色糸の数は昔は少なかった．そのため古い衣裳はしっとりした色合である．現代は化学染料で染められたものが市場で売っていることから織物の文様がカラフルになった．
4. モチーフは宗教，農業に関係深いものが多い．伝統的デザインは母から子へ受け継がれ，種族の持っている独特の個性が伝えられて行く．
5. グアテマラのインディオは古くから信仰心が強く，現在では16世紀に布教されたカトリック教と土着の宗教とが混合された神を祭り，神や霊に対する気持を織物にまで影響させている．聖像用の衣裳や宗教儀式用の織物があるのはその一例である．

   また，「完全なものは神のみがなし得ることなのだ」という考えを持ち，織物には左右対称に作ることをせず，必ず文様を不揃いにしたり，連続文様には突然向きを変えたり色を変えたりして，完全な形から遠ざけている．
6. グアテマラ＝インディオの女性は衣裳を平均2～3枚きり持っていない．そのため，すり切れるまで着つづけること，また，衣裳にも神が宿り，着てあげることから神への信仰心につながると信じている．中には金銭欲にからんで手放す人もいるが，まれである．

おわりに

グアテマラ＝インディオの民族衣裳にあらわれた縫取織文様には，かつてはそれぞれに重要な意味があったといわれるが，今日ではすでにその意味が忘れられている．しかし16世紀，外来文化の刺戟を受けているにもかかわらず，古代の民族衣裳をかたくなに守りつづけていることは他文化を受け入れることのできない歴史的背景が影響しているように思える．

通り一遍の調査では，その深奥までふれることができなかった．再びその機会が得られたならば生活の中に入って織物文化を探って見たい．

この報告を書くにあたって多くの先生方のご助力をいただきましたことに感謝申し上げます．

参　考　文　献

1）増田義郎：季刊服飾デザイン4．学研（東京）1983
2）児島英雄：染織の美28，京都書院（京都）1984
3）加藤周一：日本その心とかたち1，平凡社（東京）
4）小川安朗：グアテマラの民族服飾，衣生活 28巻 第1 P. 37～42 1984
5）C.L. PETTERSEN: MAYA OF DE GUATEMALA 1, 2, 4, 6 Museo Ixchel 1975
6）中里喜子：東京家政大学紀要 29 P. 195～201，1989